

阿波農村舞台通信

Awa Nouseonbutai Report

Summer 2004

No. 4

拜宮農村舞台は小雨にけむっていた。十三年ぶりに観る懐かしい自然は何も変わっていないが、境内を埋めつくした大勢の人たちには驚かされた。約七五〇人もの観客が集まるきつかけとなったのが、鎮守の森にひっそりと建つこの舞台を撮った数十枚の写真であった。阿波の農村舞台（阿波のまちなみ研究会刊）としてまとめられた一冊が、時を経て人間国宝・鶴賀若狭掾氏の目にとまり、今回の公演につながったという。

かつて県下に四〇〇ともいわれた農村舞台の現存率は一〇パーセント。そのほとんどが使われずにいる中で、拜宮農村舞台は半世紀ぶりに復活公演をはたした。「えびす」による挨拶で始まり、最後の演目「新内浄瑠璃」の頃には降り続いた雨も小降りになり、憂いのある鶴賀師匠の語りと溪谷の瀬音とが一体となり、杉木立を抜け舞台正面の山へ駆け上がってきた。人と自然の織り成す見事な共演に人々は息を呑み、鄙（ひな）びた山合いの舞台に歴史がよみがえった。

写真家・西田茂雄

